
カプセル

江美里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カプセル

【Nコード】

N3126G

【作者名】

江美里

【あらすじ】

安奈はきつと戻ってくる……。その思いだけが朱莉を支えている。時間も空間も違う二つの世界で安奈の記憶が消えていても……。！普通に生きてた二人の少女に世界の運命が託される。よろしければ読んでください。

プロローグ（前書き）

初めての作品です。下手ですが読んでくださるとうれしいです。

プロローグ

すべてが終わったとき、

元の世界と今の世界

どちらを選ぶかは、それこそ絆の力でしょう？

本当に悪いとは思いますが？

でも・・・・・・・・・・・・・・・・

あの子がそう望んだんですから！

シナリオは変えることが不可能なんです！

もう・・・・・・・・・・後戻りは出来ません。

プロローグ（後書き）

・ ・ ・ ・ ・ 短いし良く分からないし
・ ・ ・ ・ ・ 御免なさい。

第一話 a : 鳴らない携帯電話。(前書き)

更新しました。

第一話 a：鳴らない携帯電話。

「……………今日も来ないね。安奈。^{あんな}」

少女は、電子ペット mina に話しかける。携帯の中のお友達に。
安奈、どうしたんだろ。

そんな思いは増すばかり。

安奈失踪事件が起きてからもう一週間。

一日五回は鳴り響いていた、安奈からの着信も、もう来ない。

戻ってきてよお！

願うたびに悲しくなる。

来てくれないのは分かってるから。

だから。

祈ることしか出来なくて。

そんな自分が無力で。

気が狂いそう。

安奈が見つかる前にさみしすぎて死んじゃう。

ううん。もう心が死んでる。

辛過ぎるよ。

放課後の曇り空は、そんな少女の心を表わすよう。

ふと……………少女は、二人で見た曇り空を重ね、

涙がこぼれた。

二人の思い出を思い出して泣いたのは、初めてだった。

安奈、どこにいるの……………？

少女は地面に座り込んで泣いた。

もう、会えないの……………？

こんなに辛いなら、記憶を消し去りたいよお。

少女、朱莉は、あかり自宅へ歩き出した。

自宅にて

「朱莉！お風呂入りなさい！！」

「うん。」

ずっと見つめていた、携帯。何も言わない。

懐かしいあの曲は、もう聞く事が出来ない。

酷過ぎるよ。・・・・・。

安奈でもなく、来ないことでもない。それでも

酷過ぎるよ。・・・・・

そう思ってる自分がある。

「安奈、どうすればいいの……?」

光のない洞窟に入り込んだ少女。

その姿を、何も言えない携帯はただ、見ていた。

第一話 a : 鳴らない携帯電話。 (後書き)

中途半端な長さ・・・。。
もう少し長くしたいんですけど・・・。。

第二話 a : 休日も休めない。(前書き)

更新遅れました。

なかなか進まず・・・。

第二話 a .. 休日も休めない。

朝。

「あのまま寝ちゃった？」

朱莉^{あかり}は昨日、あのまま寝ていたことに気づき、

「宿題やってないじゃん！」

と叫ぶ。その後、今日は土曜日と気付くのだが……………。

「なんだ、今日は、土曜日かあ。」

笑いながら両親に話しかける朱莉。

苦笑いで答える両親。

今さっきまでの暴れぶりは嘘のようだ。

二人がそう考えているのは、簡単に分かる。

そんな事を言うとは大変な事になる、と考え、言わない事も。

しかし、鈍い朱莉はまったく気付かず、笑っている。

ちよっとした、平和な時間。

自室にて。

「♪この道歩いてくよ〜険しい道でも〜」

朱莉は、懐かしいメロディに歌詞を乗せる。

いつも歌ってた歌ならいつでも歌える。

人間ってそういうもんだ。

朱莉だって例外じゃない。

歌うたびに、安奈を思い出してしまうけど、歌っている。

「馬鹿だなあ、私。」

歌わなきゃいいのに。私の馬鹿。

いつも心で繰り返す言葉が今日は口からこぼれ出る。

「あはは、あはははははは……。」

自分が馬鹿らしいから笑ってやる。

それでも心は正常で……。

泣いてる自分を止められなかった。

昼

相変わらずの携帯。何か言おう？と問いかけても無言。

寂しい、と思う。

なんとなく、パソコンを起動させてみる。

「メール……。」

メール、なんでパソコンに……？

もしかして！！

アドレスで、笑いがこぼれる。

「安奈、遅いじゃんか。」

無意識に呟いていた。

第二話 a..休日も休めない。(後書き)

他にも小説書いてます。時間あれば・・・
読んでください。

第三話 a : パソコンからの贈り物。 (前書き)

ものすごく、更新遅れましたっ！
御免なさい！

第三話 a :: パソコンからの贈り物。

「メールの内容！」

朱莉あかりはそう叫び、開いてみた。
こんな内容が書かれている。

「朱莉、元気？ 安奈あんなです。朱莉がこのメールを見ている時、多分私が居なくなってから、一週間後ぐらいだと思うけど、実は一週間前くらいに出してるんだよ？」

私は今、異世界にいます。」

そこまで読んで、顔をあげる。朱莉の頭は？ハテナで埋まっている。

安奈、どうしちゃったの・・・？

「・・・・・・。理解しにくいですよね・・・・・・。」

とにかく！ 安奈さんはいままでの記憶をなくして、異世界にいるんです！

あ、ごめんなさい。私アルンです。妖精です。」

????????????????

アルン？ 妖精？ 安奈が記憶をなくした？

これってギャグなの？

ここ、笑うところ？

朱莉は、もう何と言えればいいのか・・・・・・という、呆れと？の混ざった表情だ。

「安奈に戻るね。今、私は、魔法系ファンタジーの世界にいるの！」

「理解不能。」

私は声を最小限にして呟く。

でも・・・・・・。信じるしかない。

さらにメールを読み、

世界の危機を救うためにこうなったこと。

記憶をなくしたままにはなるけど、安奈は戻れること。

ただし、記憶をなくした安奈がこの世界へ戻る可能性は極めて低い

こと。

が分かった。世界の危機がなんだ！どうでもいい！なんて言葉は朱莉は言わなかった。

「大丈夫。安奈は必ずこの世界を選んでくれる。絶対に………」

！」
朱莉の心の奥底は文句ばかりかもしれない。でも。

「生きてるなら、死んでるよりマシ。」

口から溢れる言葉は、希望に満ちている。

第三話 a : パソコンからの贈り物。 (後書き)

次は、その頃の安奈の話にしたいです。
安奈、どんな冒険してるかなあ。

第四話β：私の忘れ物。（前書き）

タイトルのβはベータと読みます。

安奈バージョンにはβ、朱莉バージョンにはα、（アルファと読みます。）をつけるようにします。
よろしく願います。

第四話β…私の忘れ物。

私、あんな安奈です。

今、私は妖精と会話してます。

いろんなことを、たくさん教えてくれるんです。

食べられる物、危険な植物。

危ないモンスターの名前と見た目、などなど。

すべて、この世界で生きていくために最低限必要な情報なんです。

「でね、ユニコーンは森の中で助けてくれるのよ。」

「へえー。」

「あなた、別の世界から来たとしても、このくらいは常識だよ？」

「う、うん………」

「あ、もう寝る時間！お休み！」

「う、うん。また明日。」

家に帰って寝る支度を済ませてから、私は元の世界の人に向けて自分のことをノートに記してみる。

私は自分の名前と、もとは違う世界にいたってことぐらいしか覚えてないの。

ものすごく、不満。前の世界に大切な忘れ物をしてきた気分なのに思いだせないんだもん。

大切な忘れ物って、いったい何なんだろう？どうして思い出せないの？なんで今、私のところにならないの？どうして？ねえ、誰も教えてくれないの？

分からなくてモヤモヤするよう。

うえ。気持ち悪う。

悩んでると、頭痛くなつて気持ち悪くならない？

なるよねえ。っていうか、私はなるの。なっちゃうの。

秋に花粉症になっちゃった不幸体質の子みたい。

悲しいよお。

あー、今日は頭痛薬飲んで早めに寝よーつと。
お休みなさい。月、^{ムーン}星。^{スター}
明日も会いましょうね？^{サン}太陽。
そしてこの世界の皆さん。

それと、明日こそ会いたいな。
大切な忘れ物。

第四話β..私の忘れ物。(後書き)

安奈バージョン、どうでしたか？
面白かったら嬉しいです。

第五話 a .. 安奈なら。(前書き)

タイトルと、物語が合わないかな・・・？

第五話 a.. 安奈なら。

とにかく安奈^{あんな}は生きてる。

だったら会える、と思う。

少し頭を直す必要があるけど、そんなのカラオケで一時間ノンストップで歌わせ続ければすぐ直る。

現実でのやりたくて出来ることはこのぐらい。さみしいけど事実。出来ることを自覚できたら、きっと安奈も直る。

まずは・・・メールには返信だ。

「とりあえず、信じる。安奈が生きてるあいだなら、出来る限り協力するし。ないかもしれないけどね。

ただし、アルンさんに条件。どんな理由でも安奈が死ぬようなことにはしないで。

それと、誰でもいい、私に安奈の状況を週一で教えて。返信してね。

」

っと。これでいい。さて、送るか。誰に届くか分からないけど、0.01%でも可能性があるなら賭けるしかない。

届いても届かなくても当たり前のことのようだし、ね。んゝ、でも退屈だゝ。なんか起きないかなゝ。

・・・・・・。言っておくけど、私は平凡な普通の少女。誰かさんみたいにどんなに不可能なことも望んだら叶うなんて特殊体質じゃないし、だったら事件を起こそう、と考える非常識な人間でもない。もちろん、これを書いている誰かさんみたいに「だったら自分の望みを物語書いてかなえよう！」って、初期設定もなにもない小説作りする少女でもない。（どうやったら学園モノがあんな意味不明の自分用お楽しみ小説になるの？）

安奈の言うことを信じたのは、嘘でも安奈が生きているという証拠が欲しかったから。

それに、ちょっと羨ましいから。自分の親友が、現実では否定する

しかないファンタジーの世界にいる！なんて、ちよっぴり嬉しい。
だから信じる。ただし、他の人に言われたら、それは・・・・・・
ちよっと無理かな。

第五話 a .. 安奈なら。(後書き)

途中朱莉の話で、こんな人間じゃない。みたいなことを言い続けたところがあるので、3人全員（1人は私ですが）モデルがいます。分かりますか？

分かった方、教えてください。

第六話 a .. 原因 (前書き)

プロローグを修正しました。
話がかなり変わりました。
ごめんなさい。

第六話 a .. 原因

「んん・・・・・・？」

朝。あの後 P M 9 時に寝た朱莉は、あかりパソコンを見てみた。

「来てるし（誰かからのメール）！」

カチ、カチカチ。ピッ。

「こんにちはー！はろー。アルンです♪朱莉さん、こんにちはー。」
映像メール。そこに映っていたのは・・・・・・。

羽付きの動く指人形だった。や、指人形より大きい。手乗りの動く羽付き人形。こんな感じだろう。つまり、妖精だと思われる生き物だ。

「してほしいこと、あるんです。ずっと、ずーっと、あんな安奈さんを覚えていてください。忘れちゃ、駄目です。朱莉さんが覚えていけば安奈さん、元の世界を全部忘れはしません。何年かかろうとも忘れないで。朱莉さん以外の人にも、そうしてもらえると、嬉しいんですけど・・・・・・質問、疑問は＊＊＊－＊＊＊－＊＊＊－＊＊＊にテレビ電話してくれれば、年中無休でお答えしますよ？それではっ！」

「だったら・・・・・・聞きたいこと、1つだけある。」

朱莉は、＊＊＊－＊＊＊－＊＊＊に連絡をする。プルルル・・・・・・ピッ。

「もひもひ。アルンびえふ。朱莉ふあん？」

「質問。なんで私たちなの？」

アルンのご飯を飲み込むと、こう言った。

「簡単ですよ。理由は・・・・・・。」

いきなり、音声が途切れる。でも、口の動きから、何を言いたいかは十分に分かった。

「自業自得ってこと？」

朱莉は笑いながら呟いた。朱莉には、心当たりがあった。

「原因は私だったのね。」

その口調は年齢^{とし}に似合わず、大人びていた。

第六話 a .. 原因（後書き）

次回あたりで完結だと思います。
早いですけど。

第九話 $\alpha\beta$: 物語は幕を閉じた。 (前書き)

遅れました。最終話です。

第九話 αβ…物語は幕を閉じた。

あの日からいったい何年経っただろう………？
いまだ戻ってこない安奈。でも、信じていれば、きっと………！

今日はあの頃のクラスでの、集まりがある。学校に集まってひたすら話す、らしい。正直いったい何をしたいのか全く分からない。でもみんな来てるからこのクラスメイト達は時間を無限にあるものと考えているのかと思い、怖くなる。そう皆に言おうと、

「じゃ、このクラスで1年からやり直すか！」

せんせーい。この子達、幼稚園からやり直させましょうよー。こんな一二十歳（大人）世に出せませーん。

そんな話をして、時間が来る。電気を消して、鍵もして、外に行く。校門の前で、私達の立ち話が始まった。話し足りないこと。上司の文句。皆と会えて楽しかったって。小学生に戻ったって。だから、次は二十五歳に会おうって約束。そして。

「あれっ？電気付いた!？」

安奈の話の最中に、誰かが叫んだ。

皆で教室に向けて走り出す。鍵をあげ、教室に。

「皆、ただいま。」

懐かしい笑顔と優しい声。

帰って来たんだね………。

あのととき、聞き取った言葉。

私のせいで、世界は少し変わった。

あの言葉で私たちは離ればなれになって、あの言葉で出会えたといってもいい。

アルンが言ってた言葉。どうして私たちなのかの理由。

「私達、本当に親友だよね？誰か教えてっ！」

って言ったから。私達の絆力。きずなりよくそれを確かめるためにこんなことになって、その言葉を思い出したから。ううん。あの後安奈がああ答えてくれたの、思い出したから。

「うん。」

って答えてくれたの思い出したからから。

私達は昔出会った人を、忘れていく。どんどん忘れていく。

だから大切な人は心のカプセルに入れていつもいっしょに持ち歩かなきゃ。

心に残せるから親友なんでしょ？見た目の距離でいっしょにいないくても心の距離が近いから親友なんでしょ？

だから、私は信じられた。

もちろん、周りの子に支えられて、両親に支えられて、ここまで来れたのは事実。

あなたなら、信じていただけますか？そんな友達作ってください。

第九話 α β ∴ 物語は幕を閉じた。 (後書き)

どうでしたか？

短くて詰まらなかったですか？

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3126g/>

カプセル

2010年10月16日00時03分発行